

朝晩冷え込みが厳しくなり、吐く息が白く感じられる季節となりました。北信五岳も赤紫に紅葉が見えるようになり、いよいよ秋が深まってきたなと感じます。

朝の会のわらべうたもずっと続けているせいで、私よりもずっと楽しんでいるせいか、すごい歓声と楽しみ方で、そのわらべうたの威力に、怖れております。まさに、幼児にとっては、わらべうたは、魂の原点のように感じます。

まもなく、薪ストーブから煙りのあがる季節がやってきます。子ども達の準備してくれた薪を焚くのは格別な暖かさです。どんな心も体も温かい冬を送れるのか、今から楽しみです。

その前に食欲の季節を迎えます。放射能汚染が各地に深まる中で、「疑わしきは遠ざける」を基本に、質素に素朴に気をつけながら、楽しんでいきたいと思っています。子ども達が、幸せに元気に暮らせるように、負の遺産を残してしまった我々の責任において、しっかりと考えていかねばなりません。

11月も素敵に過ごせるよう、願っています。



【生きる力】

元巨人の桑田投手が、故障中、毎日グラウンドを走り続け、芝生が走った場所だけ、剥がれ踏み固められて、とうとう道になってしまった（通称 桑田ロード）という有名な話がありますが、我が家の野球好きの末っ子も、毎朝の新聞配達後の小学校のグラウンドでのバッティング練習などの踏み跡が、同じようになってきており、「これはドラマだな、有名になったら、ゆうなロードだ」などと親ばかになりながら、4年間毎朝付き合っている朝のドラマを楽しんでいます。

小学校時代は毎朝6キロの道のりを自転車に伴走して、途中で冷たい手をこすりながら、ウサギの餌を取って走った事が懐かしい。肘の故障で大きな手術をして1年間のリハビリで野球を中止して、陸上をやりながら新聞配達を始め、走ることに守備とバッティング練習だけの毎日。真冬のまだ除雪のしていない中、新聞配達に行く姿はさすがに切ない思いであり、吹雪で進めないと連絡してきたこともありました。仲間が現役でやっている中で泣き言は言わなかった。今年の2月にチームに入り、張り切りすぎて、肩を故障し3ヶ月リハビリして6月に本格的復帰。中2にもなると、寝坊しがちになり、朝ぎりぎりに出発したり、新聞を粗末にしているなどとクレームがあったりと、紆余曲折の毎日だが、何とか続けています。自分の中学生時代を考えれば、よくやるなあと尊敬するし、卒業までは新聞配達及び親子早朝練習はドラマチックに続けたいと思います。嬉しいことに、チームは北信越で優勝して、中学生版の来年春の選抜全国大会大阪への切符を手にして、この冬の練習への覚悟が出来たようです。

この大会は、春休み後半、折から3番目の子どもの大学への引っ越しと重なり、どうなることか。3番目の次男は、テニス引退したと同時に、初めてアルバイトを始めました。中高通じて、テニス以外の初めての自分の時間を持ち、どんな生活を送るか（勉強はしなく、遊びまくるか）心配していたが、ほとんど夜遅くまでアルバイトに明け暮れている。同時に入った人たちは、全員すぐやめてしまったが、本人だけが続けているらしい。店長に働きぶりが気に入られているらしい。それは確かにそう思える。勉強は出来ないが、頭も回るし気も回るたちなので、配慮や心遣いや先を見越して立ち振る舞う事が出来るので、たぶんうまく働けると思われる。だから、私たちは、この子には、記憶するような勉強をしろとは言わないで、好きなテニスをしながら、この子の利点を大切に持ち合わせていけばいいだろうと信じて見守って来ました。

大学も、先生や先輩達に重宝され可愛がられて、周囲から愛されてきたので、推薦で決まり、社会福祉それも子どもの分野へ進むと言うことで思わずにんまりしてしまう。折から、数年前まで大地にいたスタッフ「岳ちゃんと絵美ちゃん」の近くで、今度は、岳ちゃんに「青ちゃんにこき使われた分、今度は ユウガでかたきを取る」と言われ、ここでも不思議な縁を感じました。更に、絵美ちゃんの妹も同じ大学だったということもおもしろい。

先日、日帰りでアパートを決めてきましたが、先輩や周囲が近代的なアパートに住んでいる中で、築20年位の古いアパートでも文句を言わずに決めて、その帰り、岳ちゃんの働くプレイパークに寄って来ました。

私の両親は、4人の孫のうち、一人ぐらいいはまともに大学を出て、働いて欲しいなどと期待されていますが、どうなる事やら、親の期待と心配はつきません。

昨日、1冊の本が届きました。タイトルは「生きる力の強い子を育てる」（天外何朗 著）です。

天外さんは、元ソニーの上席常務で、CDやワークステーションやAIBOなどを開発した人です。ソニーで42年間勤務してきた中で、こう述べています。

子どもに「いい人生」を願わぬ親はいない。知識や学歴や学力がそのままいい人生につながると信じて疑わないという信仰は確実に揺らいできているが、まだそれらに代わる新しい共通の目標は、まだ地平にあらわしていない。ソニーの従業員でも、一流大学を優秀な成績で卒業してきても、勉強ばかりで遊んでこなかった子はほとんど役にたたず、趣味やクラブ活動、ボランティアなどを通じて、知識や学力とは全く異質な「何か」を身につけてきた人間が活躍するらしい。学校教育は「与える教育」であり「引き出す」教育ではないとも述べている。

同じ昨日、午後から、齋藤惇夫さんの講演会に出掛けました。元福音館書店の編集者で、児童文学者であるなかで、子どもとメディア（テレビやビデオ、ゲームなど）に関する意見は、私が最も尊敬するものです。その話の中で、国連から子どもがメディアから犯されている危機的状況を指摘されたのは、まず、日本であり、また、世界の学校で（駐在員や企業の子どもの通う学校）で、話を聞かないで立ち歩いたり、騒いだりするのは日本人の子が多いということをお話されました。

では「生きる力」とは。無人島で一人でもサバイバルに生き抜く力でも苦しさに打ち向かっていく力ではないらしい。自らを常に磨く力であり、集団の中における適切で調和的な立ち位置を確保し、人生を楽しみ、目的を定め、挑戦し、自己実現にむかう力だという。

この集団とはもちろん人間社会のコミュニティだと思う。これには、飛躍すれば、しつてなくして集団、社会では調和出来ないだろう。自由にさせる、個を尊重するという危険性は、このあたりが参考になると思います。

さて、この意味では、我が子達、及び、大地のOB達は、どんな「自己実現」をして、社会の中で意義ある活動をして、自らの位置づけを獲得していくのか、楽しみは尽きません。